



TITLE:

計画1-3 チンパンジー幼児の砂遊び
における象徴的操作の実験的分析
(2)(X.共同利用研究 2.共同利用研究
成果)

AUTHOR(S):

武田, 庄平

CITATION:

武田, 庄平. 計画1-3 チンパンジー幼児の砂遊びにおける象徴的操作の
実験的分析(2)(X.共同利用研究 2.共同利用研究成果). 霊長類研究所年報
2004, 34: 124-124

ISSUE DATE:

2004-09-30

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/166042>

RIGHT:

計画 1-3

チンパンジー幼児の砂遊びにおける象徴的操作の実験的分析(2)

武田庄平(東京農工大・比較心理)

霊長研・類人猿研究棟地下実験ブースで、アイーアユム、クロエークレオ、パンーパルの母子3ペアを被験者とし、母子同伴場面での砂の対象操作の実験・観察を、こどもの3歳~3歳9ヶ月齢において行った。砂5kgと複数の道具を自由に操作できる自由遊び場面において、実験者同室/非同室の2条件を設定し、各母子・各条件1セッション(30分)ずつ行った。こどもはいずれの年月齢段階でも、実験者の同室/非同室に関わらずかなりの時間を砂や道具の操作に費やした。一方、母親の操作は殆ど見られず、特に実験者非同室条件で著しいものであった。こどもの砂の操作は、身体と直接関係づける操作が相変わらず多いとは言え、年月齢段階が進むに連れ、道具と関係づけた操作を行う頻度は上昇していった。自身-砂-他者という三項関係の操作は、アユムの3歳9ヶ月齢段階で、実験者に対して砂をかけるという行為においてみられた。砂の象徴的操作としては、同じくアユムの3歳9ヶ月齢段階で、コップに入れた砂を口の手前でこぼして飲むまね(正確には部分的に口に入れてしまっていたが)をした。この操作は厳密に言えば象徴的操作とは言えないかも知れないが、これまでも類似の操作はみられ、大概砂を口に入れてしまっていたが、今回の操作では、明らかに砂を口に入れないようにするという意図性がみられた点は注目に値すると考える。

計画 1-7

チンパンジー幼児におけるコミュニケーション行動の発達

水野友有(滋賀県立大・人間文化)、岡本早苗(名古屋大・環境)

チンパンジー幼児3個体の「laugh」を抽出した。子どもの「laugh」が、①どの場面で生じたか、②何に対して生じたか、その「laugh」が他個体との交渉中に生じた場合は、誰との交渉だったか、③対象の「laugh」が生じた後の他個体、および発声個体の母親の行動について記録した。また、④他個体の「laugh」に発声後の対象の行動を記録した。対象らの「laugh」の発声は生後6ヶ月ごろ、もっぱら母親との交渉の中で観察されてきた。今回の2~3歳までの結果から、屋外場面では、子ども同士の交渉場面でよく生起していた。子ども同士の「追いかっこ」では、追われている個体が追う個体につかまる直前に大きく発声することが多かった。また、「レスリング」では、噛まれたり、つかまれたりしている側の個体が発声することが多く、その後も強い刺激が続くと、フィンパーや、スクリームに移行することもあった。したがって、激しさを伴う子ども同士の交渉場面における「laugh」の発声は、ある刺激がそれを受ける側の「刺激受容キャパシティを超える」というサインとしての機能を果たしていると考えられる。

計画 2-1

色覚異常チンパンジーの行動分析-色覚異常の有利性について

齋藤慈子(東京大・総合文化)

ヒト以外の旧世界霊長類の色覚は均一であるとされてきたが、近年、遺伝子型判定によりチンパンジーにおいても色覚異常の個体が発見された。この個体の色覚を調べることによって、色覚の進化要因の解明に必要となる基礎的なデータを提供することができると考えられるが、進化要因を考える際には、色覚異常の有用性も考慮する必要がある。そこで本研究では、カラーカモフラージュ刺激を用いた弁別実験をおこない、ヒトにおいて指摘されている2色型色覚の有利性が、チンパンジーにおいても再現さ